

堀江川波鼓

近松門左衛門作

上之卷

扱も行平以下
空懸なり迄謡曲
松風の句

須磨の一澄にか
かとり細き絹
にて薄く織りた
るもの
留守一夫彦九郎
の留守中妻お種
が賀家にて張物
する
木綿釋一いふに
かく

ウタイ 扱も行平三歳が程、御徒然の御舟遊び、月に心は須磨の浦、夜鹽を運ぶ海士乙女に、姉妹選ばれ参らせつよ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴ると須磨の海士の、鹽焼衣色かへて、かとり衣の空だきなり。それは鹽焼あま衣、是は夫の江戸詰の、留守の仕事の張物や。妹のお藤は折よくも、幸いの里歸り、「サア手傳ひ」と木綿襦、糊つけ絞る兄弟の袖垂る風俗は、國に名とりの濡者と聞へしもさる事ぞかし。薙いやなふお藤、必お主の氣に入ていつ迄も奉公しや。男やなんと持やんなや、身につみてこそ知られたれ。彦九郎殿とは様子ある夫婦ゆへ、嫁入の時の嬉しさは譬ん方もなかりしが、小身人の悲しさは隔年のお江戸詰、お國に居ては毎日の御城詰、月に十日の宿直番、夫婦らしうしつほりと、いつ語らひし夜半もなし。然れ共主は

侍氣さぶらひぎ、斯かう勉めねば侍の立身りつしんがならぬとて、心づようは云いひながら去年六月の江戸立たちには、又來年の五月にお供して、下る迄までは逢あはれぬぞや。無事むじで居ゐよ、よふ留守るすせよとの貌かほつきが、目にちろくと見るやうで、ほんに忘わするゝ隙ひまもない。平常ふだん戀こひして居ゐる様やうで、いつかいつかとまつ」の木に、衣張きねはり結び細引ほそびきのゆふて思おもひや晴はらすらん。妹のお藤打ふぢ笑わらひ、「姉様あねさまそれは榮耀えいぎょうじや。私わしが様やうに根ねから男おとこのない身みでさへ、見事みごと堪かん忍にんしまするぞや。殊やじにお屋敷やしき行義ぎやうぎづよく、此この様やうな親里おやざとでも一夜いちや泊とまりも法度ほつどなり。姉様あねさまなら死しなしやんせう。人ひとが聞きいたら笑わらひましょ」姉あねアレ奥おくに鼓つらみの稽古けいこがある、高たかひ聲こゑさつしやるな。しるしく」を張物はりものに、しめし一纏ひとめる聲こゑと鏡かがみにかく鏡かがみは染物ぞめものを張渡はりわたすに用もちたる具ぐなりヤア匱けいこそ一ひと以下いげ松まつ風の匂にお

あらたのもしの
之より以下も松

も終すまりの懸聲かけこゑ、ヤア鬨なげかたみこそ今は仇あだなれ是こゝなくば、忘わするゝ隙ひまも有あり、讀よしも理ことわりや猶なほ思おもひこそは深ふかけれ」姉あねあら嬉うれしや、あれ連合つれあひのお歸かへりぞや。いでく迎むかひに參まゐらふ」と走り寄よれば、鬨なげ是こゝ姉あね様さま、エ、正躰しょうたいない彼かれば庭にわの松まつの木きよ、彦九郎ひこくわ様さまは江戸えどにじやはいの。氣きが違ちがふたか」と恥はぢしむれば、姉あねエ、愚おろかなお藤ふぢなんの氣きが違ちがはふぞ。男おとこの留守るすの徒つれ然ぜんの切きての心慰こゝろなぐさみよ。爰こゝは所ところも因幡いなはの國くに、松まつとしきかば歸かへり來きん、と謠うたつ鼓つらみの頼たのもしさ、あらたのもしの」ウタイ御哥うたや。立別たちわかれ、因幡いなはの山やまの峯みねにおふる、松まつとしきかば今歸いまかへり

風にあり下句松
に吹き来るはも
細の身の上にか
けていふ
妻—夫の事
春—張るにかく
よい仕事—竹の
節にかく

來ん。夫はいなばの遠山松、これは懐かし君茲に、須磨の浦端の松の行平、立歸りこば
我も小蔭に、いざ立寄りて、磯馴松の懐かしや。松に吹來る風も狂じて妻の留守居の淋
しき折から、鼓に心を慰むなり。あづま戻りも早近々の、風の便りの風もすどしの絹
袴、洗ひて春の長閑成、影に程なく干上りの物干棹の棹竹の、「よい仕事して嬉しやな。
江戸の男を是からは、松風きかん」とのよめきける。一子文六奥よりも、「是申母じや人
内々御聞なされたる鼓のお師匠、宮地源右衛門様只今稽古も御仕廻なり。次手ながら知
人に御成もや」とぞ申ける。種ヲ、然ればく、先刻より然は思ひしかども、張物にし
かよりて遅なはり參らせし」と、襷もとひて身繕ひ、座敷にこそは出にけれ。源右衛門
膝をなをし、「我等は京都堀川下立賣に住居の者。御家中の方々へ鼓の指南仕、ゆくく
御奉公の望も叶ふべき様子により、折々御當地へ罷下り、壹年半年五ヶ月三ヶ月逗留仕
候へ共、未だお連合彦九郎殿には御近付にも成申さず。此比御子息文六殿鼓御所望に付
師弟の契約致せしが中々御器用千萬、嗚お袋の御満足推量致候」と恣慙にこそ申けれ
女房會釋しにつこと笑ひ、「母と仰候へば彦九郎も年寄に聞へ候が、もと此者は我等が實
の弟を、連合養子に致されまし、僅か御扶持の小身者。先只今は御家中の、然る方へ預

御供一殿様のも
座配しとくも
もてなし方しと
やか
姿なら一姿とい
ひ
おはしませーゴ
ザリます

内へも云々彦
九郎の内へも
出をねがふ
はいて一田舎の
ポツと出

牢人の親一浪人
の親なれば御馳
走はできぬと也

ケ置て候ふが、何とぞ御師匠様の御世話にて、鼓の一番も打習はせ、御直の御奉公に出
し度との念願にて、連合留守の内なれ共祖父が御頼申されたり。此五月には連合も御
供にて歸られん。其時分は一番も打て父御に聞する様に、一しほ頼みあけます」と挨拶
座配しとくと、物やはらかで屹として、姿なら面體なら、京のどなたの奥様にも、誰が
否とは因幡山國育ちとは思はれず。妹お藤も立出て、「私は藤と申て是成者の妹にて、御
家中に奉公勤め参らすが、文六に御念比お嬉しうこそおはしませ。姉の連合彦九郎殿留
守の事なり小身なり、間所逆も無き儘に洗濯萬事に至るまで、斯様に親の所にて致ス譯
にて候へば、文六鼓の稽古迄此所にては何事も、御不自由に候はん。彦九郎殿が戻られ
ては、内へも申入れましょ。夫れお盃でも持てこい。やい父様はお留守か、獨り女
子がいなりや、お客が一人あつてもア、不都合な事計。ア、ほんにゑへゑ、おは
づかしや」と會釋する。目元は姉に劣らじな、誨いや何もお構ひなさるよな」と、挨拶と
りどり成内に、下女は心得酒肴取揃ゑてぞ出しける。女房お種は酒好にて「ヲ、是は氣
が付た。牢人の親なればお肴はなくとも、お慰みに一ツ」といへば、誨御用もあらんに
近比是は忝し。まづ夫より「誨いや其方よりお辭義なし」誨然らば文六殿より」といへ

流石酒好云々
も種は酒好なれ
ば文六にさす盃
を我手にとりて
と也

まさへー源がさ
さんとする盃を
戻して甲び飲ま
しむ

笑止がりー氣の
毒がる

共流石酒好み、手まづさへぎる盃の、狸母甲斐に私から、お爛を見て」と引受てさらり
とほし、文六にぞさしにける。又「我等はかつて飲ぬ」とて、ちよつと飲で「お師匠へ慮外
ながら」と禮をなす。源右衛門戴きて素より上戸の家の者、舌鼓たんくと打ち、「ハッ
ハッ天晴御酒がなく。拙者も深ふは下されぬが、少御酒を好む故、方々吟味致せ共、
是には中々京酒も及びなし、色よし香よし風味よし。御亭主様の御心迄、御懐かしう候」
と、酒挨拶の客振の、よきも過てはあだとなる先の見へざるうたてさよ。又「直に是を文
六殿、返盃申す」といひければ、狸爰は母がおさへまし、あいを致してあけません」と、
又引受てついとほし、「酒がお氣にいつたらば、一ツあがつて下さんせ」と置せもあへず
盃取、又「何が扱下されん」と、たんふと請て一息のみ、文六にぞ戻しける。今度もち
よつと口付て、又「憚りながら伯母様へ、上ませう」と酌す所を、狸はてさて如何に飲ぬ
と、餘り素氣ない一ツ呑や。母があいをしませう」とたぶく受てつよと干し、「母の身
で我子のあい、目出度上の目出度さに、江戸の父御の名代に爰は一つ重ねませう。サア
大あいを頼みます」と又源右衛門にぞさしにける。又「扱は御内義様には少御用ひと見請
たり。馴々しき事ながらお手元を見ん」とつき戻す。妹は笑止がり、「いやく深うはたべ

張合―負けぬ氣
になる

勝手―臺所とか
けたり

つはものゝ―露
曲羅生門の句

さし―二人さし
むかひてはいか
が

門さし時―夕方
はかつく―離く
なる

られず。殊に此比あてられて氣色も勝れぬ折柄なれば、姉様もふおかしやんせ」と側か
らたつて止むるが、張合に成上戸の癖。婿、エイ何云やる。お肴もない酒なれば、飲であ
けるが御馳走」と、得手勝手よりかへ銚子。客は手鼓一曲の、「是では一ツ」と酌し巡る。
盃とつては天晴なウタイ つはものゝ交際、頼みあるなかの酒宴かな。盃數遍傾ける日
も晩景に及しかば、妹の主人の屋敷より中間來つて、「是申お藤女郎、迎ひに來ましたお
歸りなされ。御門が閉る」と呼はれば、扇ヲ、く角藏か太義じやの。姉様去らば歸り
ませう。お客様へも不禮ながら儘ならぬ奉公人。又重ねて」と辭義を述暇乞して歸りけ
る。文六もおとなしく、「私も旦那の屋敷今宵は客もある筈なり、お暇申候はん。祖父忠
太夫歸らる迄御師匠様は此所に、今暫く御座なされ下されい」とぞ申ける。源右衛門は
「兎も角も。さりながらお袋様と、さしでは如何なり。あの御座敷へ參らん」と、
其座を遠慮し立にけり。お種は文六送つて出「是なふ其方は内へ一寸立寄り、祖父様に
お歸りなされと申てたも。我も又戻りたい、りんを迎におこしてたも」文「心得ました」
とうち答へ、主人の屋敷へ歸りける。門さし時の町はづれ、女主人の年若き、夫は永の東
の留守、心慥かに持爲と、一ツ過する酒好み、亂れぬ顔もほかつきて、重たき頭撫櫛や、

よせい―餘情

そもじ云々―君に焦れても人目めつて儘ならぬ爲に心を碎くと也

はぢく―ぶるぶる

身體―身代

向ふ鏡によせいあり、殿待顔の夕べかな。同じ家中の相役人、磯邊床右衛門は病氣とて、江戸供免され在國せしが、下人も連ず酒戸あけ、「御見廻申とつと入る。お種はつと鏡を退け、「忠大夫は今朝程より出られ留守にて候」と、云捨て入る所を、抱き留て、床是申、お留守を存て參るからは御親父に用はなし。そもじ様故こがれ舟、人めの岩に波堰て、碎くる磯邊床右衛門、今年お江戸を勤むれば、御加増あるは知れたこと。武士の立身振捨て、虚病を構へ願をあけ、御國に止まるも皆君故と思召せ。病氣も虚で虚ならず、戀が病のお種様、假の情のお薬をちよつと一服頼みます、拜みます」とぞ抱締る。女房少酒には酔ふ。「エ、嫌しや面倒や」と振放して退けれ共、身の毛も立て怖しく、はぢく―慄ふて居たりしが、「こりや侍畜生め、彦九郎殿とは念比なり、人間の道に反くといひ、御家中の後指、殿様のお耳に立ば身體の破滅と成が知らぬかや。小倉彦九郎が女房ぞ、侍の妻なるぞ。推參な事をして必我れを恨みやるな。沙汰はせまいサア歸りや」と、苦々しくもいひければ、床いやく―人の譏りも身の恥辱も、思ふて仕廻て上の事。よし御承引なきからは、こなたと爰で刺違へ、上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ、とも恥を晒さんと覺悟を極め來りし」と、刀を抜て胸倉とり、「どうぞく」と威しける。

歩に首云々―僅
の罪にて殺さる
る
無下―無茶

あこぎ―窓深な
邪淫の云々―誦
曲女郎花の句

だくつき―どき
どき騒ぐ

女心の誠と思ひ、大死といひ無き名を取るも口惜しし。誑さばや、と分別して、「ム、是は眞實か」床ヲ、殿様の御勘當請 歩に首打ると法もあれ、偽りはない云」と。翻扱も嬉しき御心底、何しに無下に致すべき。され共爰は親の家、今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ、そつと忍んで下されなば、打解け思ひ晴そう」としと打てぞ誑しける。無智無學の床右衛門、一言にだまされ、ほろりとなり、「忝い御情、此上はあこぎながら、迎もの事に今爰で、ちよつとちよつと」と縋りしを、「聞わけなや」と逃廻る。襖の彼方に源右衛門鼓を打て聲をあけ、蓋邪淫の悪鬼は身を攻てく、劍の山の上に戀しき人は見へたり。嬉しやとて攀登れば、劍は身をとほす、磐石は骨を碎く。こはそも如何に恐ろしや。なふ怖ろしやくく」翻人が聞たそりやくく」と、威されて床右衛門「今のは何も皆じやれじや。嘘じやくく」と云捨て走つて表へ逃てけり。無慙やお種は氣も据らず。羞かしや京の客、今のあらまし聞給ひ、欺して云ふとはそも知らず、心の蔑しみ計かは、家中一ぱいする人の、世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼て、下女呼び起し酒の爛、「表も閉てもふ寐よ」と、獨り酒酌み憂さ辛さ、忘るゝ内も忘れぬは、江戸の夫の事計。涙にいとど朧夜の月さす縁に人音す。翻ヤア是は源右衛門様

「やう大事一房のやうなれど取りやうにて大事となる

霧は袋一霧は錐にて袋の中の錐は自ら願はるとの喩

つけさし一呑み

しんき一氣を揉まする

お前はどれへお越」といへば、源「イヤ女中計は遠慮に存、罷歸る」と立出る袖をひかへて、種扱はお前は今の事、御耳に入たるかや。勿躰なや恐ろしや。彦九郎と云ふ男を持、眞實に云べき様はなし。當座の難を逃れん爲、欺して申た分の事、御沙汰なされて下されな。偏に頼み参らす」と手を合せて泣ければ、源右衛門も詮方なく、「いや聞たでもなく聞ぬでもなく、餘り傍から聞にくと諺を謳ひ紛したり。申てもやす大事、拙者は他言致すまいが、霧は袋と外よりの、取沙汰は存せぬ」と、振り切出るを縋りとめ、「然りとはむごい御詞。御身様も若い殿、我も若い女の身、實の斯した事聞ても、隠しかくすは世の情。此分で去せては私心落付ず、云まいと有固めの盃、取交して」と銚子を取、濃茶茶碗にちやうど献ぎ、つとと干て又引受、半分呑でさしければ、源「こは珍らしいつけざし」と押戴いて呑だりけり。お種も餘程酔はくる、男の手を慥と取り「コレこな様迎も主有者のつけざしを、参るからは罪は同罪、何事も沙汰する事はなるまいぞ」と詰ければ、「いや早かよる迷惑」と飛で出るを抱きつき、種「エ、餘り懋知らず扱もしんきな男や」と兩手を廻して男の帶、解けば解る人心、酒と色とに氣も亂れ、互ひに締めつしめられつ、思はず誠の懋となり、種「サア此上は今の事、沙汰はならぬが合點か」源「チ、く

障子しやうに
かく

餘所かと思へば我身の上、此事を隠さいでなんと障子を押明て、うたと寢枕かりそめの、縁の端又因果の端、うたてかりける契りなり。やと更渡る時しもあれ、父の成山忠太夫下人も連ず立歸り、門の戸荒く敲いたり。お種はつと耳に入、酒の酔醒目も覺て、我身を見れば帶紐とき、男と添し亂れど、「南無三方淺ましや。床右衛門めが不義の沙汰、世間の口止せん爲に態と戯れ仕懸し迄、慥に夫れは覺しが其後は酒に酔、夢現共わきまへず酒を禁れと常々に妹が異見を聞入ず、我夫ならで一生に覺へぬ男の肌觸て、身を汚したか淺ましや。女の罪の第一にて未來は愚か此世の恥、親兄弟迄名を捨る身をいかにせん悲しやな。夢になつてもくれよかし」と、咽び上てぞ泣るたる。歎の音に源右衛門目を覺し起上り、是も同じく醉まぎれ、男たる身の道を背く。はつと計に目を見合、互に恥かしくと、おもはゆ氣にも泪ぐみ差俯向てぞいたりける。忠太夫は待かねて猶荒けなく門叩く。「あれ父様に見られては、死ねばならず如何せん」と、此所彼所に這い隠れ、下女が臥したる夜著の内、うろたへ入れば飛上り、丸裸體にて「なふ悲しや、うらが寝た懐へ盗人が這入て、雪の肌を荒すは」と、わめき廻る勢ひに行燈を踏倒し、戀路の闇の暗りと、唄ふは物か是も亦、由なき事の迷ひなり。表は連りに聲を立

戀路の闇一八百
屋の娘も七こそ

懸差の間に暗りに由なき事を仕出して罪は死罪に陥りて云々(松の落葉)

弱て精進云々つまらぬ下女と不殺せんとするに願ふ

「明よく」と叩くにぞ、お種も男も震ひ呟き、後手に袖を引、我身で男を押隠し鎰金明けて、「父様かサア御入」といひければ、親にてはなかりけり。床右衛門貌隠し手を指延、兩人が袂を一ツにしかと取、「サア不義者證據をとつたる」と、聲をかくれば南無三方と潜戸はたとさしけれ共、とつたる袂放さばこそ、詮方なくも源右衛門、腰の脇指するりと抜き、二人の袖下切放し、戸を引明て逸散に、我が屋をさしてぞ逃去りける。床右衛門は袖下を懷中にねぢこんで、戸をこぢ明けて内に入、「去とは御内義曲がない。人には免す下紐の、我にはなぜつれないぞ。此事隠してくれならば、今宵のお情頼みます」と、暗がりに手を擴げ尋廻るぞ怖ろしき。立まよふ内に裸身の下女にはつたと行當り、「こりやこそ爰に」と抱きあふ。下女は勝手は覺へたり、我寢所へと逃行ば床「こは忝し難有い」と、夜著引被ぎかつぱと臥す。下女はいやがりねぢあふ間に、「お種様のお迎ひにりんが只今参りました」と、提打ともし來ける。火影にすかし床右衛門、よくく見れば下女子、「エ、勿躰なやいまくし。鱒で精進をおちよふとした」と、跡見歸らず逃て行、暗夜のうつよぞ三重うつくしや。

中之卷

扱も見事な云々
 一松の落葉五卷
 蒲團はりーふと
 んしく事
 はな一鼻頭
 先手一咲きにか
 からの頭一唐紅
 管鎗一管々しに
 かけて柄に金を
 嵌めたる鎗
 夕告鳥一鶏、逢
 坂の關の故事
 此處東關紀行の
 文を取る
 六番頭一殿中の
 宿直警衛を勤む
 る
 使番一大名の治
 行を巡檢する役
 草甲一草張る種
 杭
 遊藤箱一弓に
 藤の袴き方にて
 貞丈雜誌に委し
 鞆一失入る器

歌扱も見事なおつどら馬や、七ッ蒲團に曲録すへて、蒲團はりしてナ小姓衆を乗せて」
 海道百里をはなでやる。花もさき手の供道具、素鎗片鎌十文字 からのかしらの紅の、
 きぬは紅梅魚は鯛、云もくだ鎗人は武士、奴が今朝の朝酒の天目ざやにかぶろさや、ふ
 れふれふれや、白雪の富士も淺間も跡に見る、道も長柄の數鎗の、鞘にかよりし夕告鳥
 關より西にかくれなき、名を望月の引馬や、轡の音のしやんく、りんくしやりりん
 くくと、心拍子に乘かけは六番がしら使番、侍大將奏者番、旗大將の跡先に、續きて靡
 く旗棹の、世時治まり四方の海、波靜かにてあまつ空、風もなき刀見へたるは、醫者よ
 儒者よと物識りも、知らぬもなべて行列に、舌をまく串挾箱、引もちぎらぬ持弓の、滋
 藤塗ごめ其の數は、いざやしら木にそば黒の、弓に靱に矢籠矢箱、二重の覆させながの、
 其具足櫃甲立、立て程なき東路も、一歳越し國の留守、七ッ何事七ッ道具の、臺笠たて
 傘馬印、これぞと名にし大烏毛、御めしの駒も乗替も、己が古郷の北風に、勇んで嘶ふ
 勢ひや。跡におさへの對道具、國久しかる目出たかる、さこそ嬉しからう殿、君々たれ

矢箆一同上
きせな鎧が
君君たれば一君
離不君臣不
可一以不臣幸
經）
悦びつかひ一祝
に來る使

馬廻一殿の傍に
附添ふ武士

眞苧一問男あり
との謎

ば臣も又、しん樽の酒ざよんざや、濱松の葉の散り失せず、萬代不易國入の、國こそ久し三重かりけらし。家中の上下、親妻子に壹年ぶりの對面に、彼方此方の悦づかい、祝義土産のとりやり持、中間小者に至る迄、ざよめき渡るぞ賑しき。中にも小倉彦九郎、數年の勤め舊功によつて、東發足の刻、拔群の御加増給、若黨下人彌増て、一子文六お種兄弟悦びあふ事限りなし。爰に主人の妹婿政山三五平と云ふ馬廻り、是も此度歸國なりしが、お種の方へ使を立、「先以道中何事なく御供にて、久々にて御對面、さぞ御満足候はん。此方とても同前たり。扱何がな土産と心ざし候へ共、さして變りし品もなし。是は關東麻とて名物の眞苧、如何しくは候へ共、御留守の間お種様、眞苧をおうみなさると道中すがら家中の沙汰。罷歸承はれば御當地にても其沙汰ゆへ、進上致候」と云もあへぬに「甲、あなたのは誰様より」「乙、こなたのはは何兵衛様、お種様へのお土産」とて、送るに付ても女房は、心にこたへ取沙汰の、夫の心も付やとて、貞を見れ共夫は然せる氣もつかず。苧、それ此方も荷をときて、相應に土産物見合て送るべし。ヤア忘れたり、まづ舅殿へ參らふぞ。それく袴「あい」と云ふて女房はやがて奥にぞ入にける。すり違ふて妹のお藤するくと走り出、袖に取付「是彦九郎様、エ、おまへは曲もない、

たくるー引たく
はなれぢー鼻捻
りにて木柄の末
に鼻を附けて鼻
馬の鼻を捻る馬
具(但言鼻馬)

お江戸迄二度進じた文の返事はなぜなされぬ。私心は猶此文に細さの事、分別きはめ書
ましたれば、否でも應でも、合點してもらはねばなりませぬ」と、封ぜし一通姉聲の懐
に押入る。彦九郎苦い良して、「ヤア其方は狂氣めさつたか。尤も姉を呼ぶ時分、其方の
談合もあつたれ共、縁なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年と云年月を重ね、子ま
で養ひ置たる中を、いか程に思はれふが、去つて其方に添んとは、此彦九郎は得申さぬ。
斯様な文は手にとらぬ」と投付表に出にける。姉のお種奥より見て、つか／＼と出文
を拾ふて懐中す。厲いや其文は大事の文人には見せぬ」と取り付を、はたと蹴倒し棕櫚
箒木おつとつて、散々に打伏する。「あれよく」といふ聲に、文六下女共かけ付て、「何
事か存ぜね共、御勘忍」と縋り付、箒をたくれば、荷物に附しはなねぢ引ぬき、貞も頭
も破てのけと續け打にぞ打たりける。お藤は聲あけ「なふ痛や死ぬるはなふ。助けてた
べ」と泣叫ぶ。文六はなねぢに取付、「是母様いか様の事か存ぜね共、詞にて御叱りもあ
るべきに、荒氣なき打擲叔母様目でも眩ふたらば、何と云譯なされん」と苦々しくいひ
ければ、「イヤ打殺ても大事ない。姉の夫に執心懸け江戸迄文を遣たるをたつた今慥に聞
今も拾ふた是見よ」と封じめ引切さつと明ヶ、「是が嘘かある事か。姉を去て暇をやり、

生瓜一熟情を示す爲の所爲

たつてさゆる一強て交へる

念比一情を通ずる

私が夫婦になろと生瓜放して入たる文。是が嘘か讀で見よ。ふと憎や腹立」と、飛懸り鬢を取つてくるくと、手からまいて膝に敷、「親にも子にも替じと思ふ、稚馴染の我夫、一年隔てし永の留守、月よ星よと待うけて、漸と今朝殿御の貌、見たぞ嬉しや來年までは、一ツに寢臥もせうものをと、悦ぶ矢先におのれめは、姉を去れの離別のとは、よふもいふた畜生面、生てをくも腹立や」と目鼻も別ず打叩く。姉なふ是には云譯だんだん有。取押したべ人々なふ。息も絶ると叫ぶにぞ、人々「先云譯を御聞」とたつてさゆれば姉お種、「サアさあ云譯が立ぬからは此度は命を取。云譯あらばして見よ」と、とつて引立突退しは、斷り道理至極なり。妹苦しき息をつき、亂れし髪を搔撫々々涙をおさへ、「此云譯は姉様と差向ひにいふ事ぞ。皆々次へ」と云ければ何れも立てぞ退にける。姉、ヤア子細らしうせず共云譯を聞ん」といへば、妹涙をはらくと流し、「是姉様、自が彦九郎様へ状を付、姉様去て下されといふてやつたは姉孝行、こなたの命が助けたさよ。いふに及ず覺へが有ふ。鼓の師匠源右衛門と念比してござらぬか」と、いふ所を飛懸り口を押へ「是黙りや。假初ながらやす大事、何を見て然はいふぞ。證據を出せ」と云ければ、妹、チ、證據迄もない事よ。此腹には四月に成子は誰が子にて候ぞ。下女の林に

思ひ月一正五九月にて今五月なれば思ひ恨む打みしやがる云云一打潰されてもよい

鑪火を握れ一火起請にて罪なき者は之を握りても害なし(貳家盛衰記)

まかなひ一つくちよ

け、「申おゑ様おつま様、且那樣へ詫言して御禮申て下さりませ。道知らず恩知らず大悪人の私に、金迄出して此難義お救ひにあづかること、親も及ばぬ主の慈悲。今日は思ひ月廿八日御縁日不動の劔に喉笛を突通され、身の家職の鐵床に打みしやがる法もあれ、又や二度悪性ごとふつよと思ひ切りました」と、涙を流し云ひければ、母娘、ヲ、でかしやつた、それが其方の身の果報」と、皆々悦びほめにけり。親方も機嫌を直し、「流石男じや満足した。此上ながら此方の心の落付ため、誓文の證據に」と、三尺ばかりの掉鐵の、夕日の如く焼けたるを鐵挾にて引出し、鐵床にどうと直し、「是は此度禁中様お内侍所の釘下地。此内侍所には日本の神々御ぼん有、八萬餘座の神の司の御寶殿、其釘に成黑鐵、今の誓文偽りないと見る前で鐵火を握れ。心に誠ある者は氷よりも冷やかなり。少も偽有者は腕焼けたぞれ落ると云、佛神に嘘はない。其方も發起して、今の誓文立るからは熱いことは有まい、サア握れ」と云ければ、平兵衛色變り、只「はよはよ」と計にて跡退りにぞ成にける。女房笑止がり「ハテ爰な人うろたやる、思ひ切たが定なれば鐵火に怖い事はない。但は當座まかなひに金取欺しの空誓文か。去りとは悪い合點。一生の病をぬき、身上の固まる事。さつぱりと思ひ切りや。思ひあふた馴染の中、

そんをつぎ—そんは孫にて血統後紐—幼少の時
は帯の紐を後てぶ故

前世の云々—前世に作りし罪が
毒酒となつて來り

腕ほし—腕節
しほらし—殊勝

て忘るなどの御詞が、骨にしみ肝に残つて得忘れぬ。姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を呑。藤よ母に成代り異見をせよ、と其跡は早息ぎれの窠れ良、身に付添て忘れず、朝夕位牌に向へ共此遺言をお經と思ひ、一遍づつは繰て見る、姉様は早忘れてか。此世の妹に歎をかけ、來世に御座る母様の、屍に苦患が掛るは」と、口説つ恨つ聲をあけ、伏沈みてぞ泣居たる。姉は詞も涙にぶせび、「好みし酒も今思へば前世の業の毒の酒。無明の酒の酔さめて自害せんと思ひし、天の良を今一度見たい」と思ふより、今日と延翌日と暮世間に恥を晒す事、我身に悪魔の見入か」と、返らぬ愚痴の繰言に、兄弟すがり抱きあひ聲もおします歎たる、世に是非もなく哀なり。時に門外騷がしく、「口論有か先暫し」と、兄弟奥に入れば彦九郎妹のゆらは、長刀をとりのべて兄彦九郎を追懸來り、「是兄様、妹とは云ながら政山三五平と云ふ侍の妻なれば、義の立ぬ事あれば兄とても免されず。いかにいかに」と申ける。彦九郎はつたと睨み、「ヤアこざかしき女郎めが、兄彦九郎に向つて義の立ぬとは推參千萬。子細をぬかせぬかさは長刀持たる腕ほし共に、ねち折てくれんず」と、大きに怒つていひければ、ゆらからくと笑ひ、「ヤアしほらしい腰拔殿、様子を云ふて聞せ申さん。こなたの内義は鼓の師匠、京の宮地源右衛

たるむ一透ある

珍事一大事

門と密通して御家中此沙汰まつ最中。それ故土産に眞苧を遣はし氣を付ても、女敵をも得討ず、きかぬ貞する腰拔の彦九郎、其妹とは添ひ難し、と夫の政山三五平我に暇をくれられて、兄が腰が立たらば其時は立歸れ。元の如く夫婦にならんと離別して來つたり。是腰拔の兄御、我が夫に添せうか添せぬか。其方の一心一ツぞ」と長刀取のべ閃かしたるまば切んず勢ひなり。彦九郎横手を打て、「ム、是は珍事を聞物かな。其源右衛門とやらん音には聞ど面は見ず。遂に家内へ出入せず。證據や有」と問ひければ、ゆゑ「ヲ、三五平程の者が證據をとらで云べきか。則傍輩磯邊床右衛門、氣色を見てとり見廻にもてなし、兩人忍び合たる夜の兩袖切て取たるが、御家中取沙汰有上は隠しても隠されず。いかに傍輩の念比とて直には此事知されず。と夫の三五平殿に注進ある。是御覽せ」と懐中より二人の袂を投出し、「是にも何と疑ひか」と色を違へて申ける。彦九郎取あけ見て、「男の袖は知らね共、女の衣裳に覺へ有。こりや妹、たつた今其方が恥辱を雪いで得させんず。此方へ來れ」と打連て座敷にこそは通りけれ。家内の上下是を聞き、鳴をひつそと静めし時、主人少しも騒がず、「女房共來れ。世倅文六來れ」と詞少なに呼ければ、何れも「すはや大事ぞ」と、そろく夫の前に出頭を下けて居たりしは、身も冷渡り魂消

身の鎗刀―身か
ち出た鎗

中立云々―不義
を取持つ人も同
罪と也

まかけて―かけ
は中途半拂にし
て

息を閉たるその中に、無慙や種は心にも工まぬ不慮の悪縁の、身の鎗刀夫の手で刃に掛
るは覺悟の前、やがて逢んと永の留守辛抱盡せしかひもなく、去年發足の前の夜の枕が
限りの枕とは、今殺さるゝ今迄も、思はざりしと思ふにも、今一度夫の良見たやとは思
へ共、涙にくれて目もあかす差俯向てぞ泣居たる。主人兩袖投出し、「妹ゆらが云分定て
何れも聞つらん。女云譯ないかいやい。ム、さこそく返答は有まじき。扱不義は中立
同罪たり。藤は中立知らぬか」といへば、藤ア、愚なり彦九郎様、中立をしる程ならば、
かやうに恥を見るべきか」と又さめくくとぞ泣居たる。彦扱は下女めが中立ならん。其
奴呼べ」と呼出せば、かちくくく身はふるはし、「ア、御勿躰なや私はなんにも存
ませぬ。此間お種様、人に隠して子墮藥を買てくれとおしやりました、一貼を七分宛
三貼を貳匁壹分で買て參たばかり。然りながら旦那様のお聞なされたら、高ひ物を買
たと叱られふかと思ふて、錢はしかけてやりました」と、何をいふやら譯もなし。彦九郎
はつと愕き、「扱は懐胎したるか。やい文六、おのれ若年なれ共、是程家中の沙汰といひ、
何として源右衛門疾に討ては捨ざるぞ」又「いや我等も今朝承り、家來共に申付かれが旅
宿へ討手に遣し候へば、二三日以前に京都へ歸り候」といへば、彦ム、是非に及ず。そ

そでにして一餘
所にして

切羽一鋼際の薄
き金板

すゝどさ一鋭さ
番頭一武家一際
の番士の長
足弱一ゆら、藤
をさす

それは餘りに云
々一之より次の
「泣ければ」迄本
文にはなきを堀

れ持佛堂に火を灯せ。女立て持佛へ來れ」といひければ、女房泪を押拭ひ、「未來の末の後の世迄御憎しみの有べきに、持佛堂へ參れとは流石剛染の御情、いつの世にかは忘るべき。その御心を此年月、知ていとしき我夫を、そでにしての不義ではなし、夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど、いへば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは如何とは存ずれ共、是は我身の云譯なり 免してくだされ是御覽ぜ」と、胸押開けば九寸五分臆さきに切羽迄、刺通してぞ居たりける。哀れ成ける覺悟なり 藤文六はあつと計涙は胸にせき來れど、しほれぬ主人の良に恥ぢ齒をくいしばり歎きゐる。彦九郎刀を抜きとつて引寄せぐつと刺し、返す刀に止めをさし、死骸おしやり刀を拭ひ、しづく仕廻て立たりし、武士の仕方のすゝどさよ。今朝脱捨し旅裝束、又おつとつて笠草鞋、刀追取「是文六、我は是より番頭へ訴へ、御暇申捨直に京都へ馳登り、女敵を討間、儂は足弱引連て、一門方へ立退」と云捨て出れば藤文六、ゆらも同じく引添て、俱に行んとせり合たり。彦九郎大の眼に角をたて、「町人風情壹人におのれらを召連て、此彦九郎に彌恥を與ふるか。壹人にては付來らば勘當なり」と怒りける。各々一度にわつと泣、それは餘りに情なし」藤、我等が爲には姉の敵」又、我爲には母の仇」ゆら「いや我爲にも兄嫁の」

川波鼓にて種ひ
たり次の「さ」は
ど「より」諸共「に」
迄も同じ

寺御幸云々東京
都の町名を東上
り西に順に數へ
たり寺町、西麩
屋町、富小路、柳
馬場町、開町、
東洞院、車屋町、
扇丸、兩替町、
室町、衣棚、新
町、釜座、西洞
院、小川町、油
小路

三人「敵を見捨ておかれうか。然りとては連てたべ」と、三人一所に手を合せ、聲をあけて泣ければ、夫も今はつよみかね、勇めるかんばせ悄悄と、「さほど母姉兄嫁を、大切に思ふ程ならば、など最後に衣をきせ、尼にせん逆命をば、なぜに貫ふてはくれざりし」と、空しき體に抱たけつと叫び入れれば、残る人々諸共に泪につれて立出る、物の哀れ武士の身こそ三置仇成習なれ。

下の巻

寺、御幸、麩屋、富、柳、堺町、相の東は玉しきの、御垣にかこふ五ッ緒の車、烏丸、兩が室、衣新釜西小川。油さめが井堀川の、岸の平砂を白波に、照せば今も夏の夜の、下立賣のほのく明、六月七日祇園會の、長刀鋒の刃先に打からし時の鶏、鋒と、門出を祝ふ力紙、拳を固め四ツ辻に、四人さまよひ立ち居たり。常さへ賑ふ上京の、折しも今日の祭客、下へくと朝霧の、ひまに門掃き打水の、斯る姿を咎むやと、西と東に行別れ立やすらへる折からに、豆腐商ふ商人の「きらすきらす」と聲高に、賣る辻占の耳に立、心後れと成やせん、南無三寶と橋詰に各々寄れば向ふより、白川石を商ひに賤の噂らが馬

あり
 紙鬮會一開院院
 天延三年五月祭
 禮之始也(雍州
 府志)

長刀鉾一山車の
 上の鉾

菊鉾一山車の鉾
 頭に日の丸あり

て道頭を象る
 力紙一膝頭の下

にあつる紙かみ
 入しく出立つ

時に用ふ

かゝる一懸ると
 斯る

きらず豆腐の
 粕、斯らずと音

通

あながまア、
 やかまし

壹人もば一人
 をば

ちやくくつたー
 堀川波鼓に「ち

やくくつた

追連て、連を呼さへおなじ名の、「お藤や、今日はあきなひ早しまふて、祭りに行ふと氣が急て馬に沓さへ打なんだ」藤ア、然れば同じ事。今朝は少し寝過して、こちらも沓を打ずに来た。誰も今日は皆打れぬ。いつそ打ずに此分で、とつとよ引て歸りやいの」とどつと笑ふて通りける。京童の口ずさみ、家々ごとに朝もよひ、萬に心もみ瓜を、刻む音さへ比叡の山、峰に響くと傳へたる、洛中の今朝のあながまと、心亂るゝ計なり。中にも藤は小聲になり、「いづれも何と思召す。最前の豆腐屋がきらずくと賣たるさへ、心に懸る其上今の石賣躰共が、馬の沓が打れぬ打ずに引て歸れとは、如何にしても氣懸りなり。其上世間に同じ名の、あるは習ひといひながら、折しも惡ふ壹人おばお藤と呼んだは何事ぞ。味方の心後れては仕損するは定のもの。天道よりの御報せ、又翌日の日も有ものを、今日は延引せまいか」と、いへば皆二の足にぞ成にける。斯る所へ西橋詰の髮結床より、さばき髪の若い者楊枝くはへて來りしが、友と覺しく行逢たり、茲ヤア是は早々から髪も結ずに何處へ」と云ふ、擧髮然ればく、祭に行今日のはれ、月代剃せにいつたれば、扱も切たはく。あら髮剃の刃は劍、天窓うちを切ちやくつた。彼奴が手に懸ては幾人でも切そうな。是を見よ」といひければ、茲ハア、切たりく。是

破軍—運が直つたの義、破軍星は北斗七星の第七星其に向つて進むを凶なりとす

茶字—舶來絹

線—麻絲を繰つて作れる目の荒き織物
十枚のリ云々—銀十枚と書いた包紙を糊にて貼つた臺（貞丈雜記）
先を折る—妨げ

で客に行たらば祇園祭ではなふて、軍神の血祭じや」と笑ひてこそは別れけれ。四人嬉しき辻占の、「今のを聞たか」聞きました」サア破軍がなおつた仕濟した」と、そとろに笑ふて勇みをなす、心底思ひやられたり。彦いざ此運に乗て討たん時刻延すな用意せよ」と、帶締直し身を輕め、内の勝手を知らざれば、爰にて談合無益の沙汰。女二人は堀川おもて、小見世に上つて障子蹴破りつよといれ。我々親子は立賣の門口より、中戸を蹴破り込入べし。而體を見知ぬぞ、人違へさするな。神妙に意趣を述、物の見事に討たんずる。はやまつて欺し討、卑怯などと云わするな。合點か「合點じや」彦心得たか「心得た」「サア込入ん」と突立所へ、あれ見たか、油の小路を此方へさし、らうそく鞘の鎗印、知行ならば三百石、廿餘りの若侍、茶字の袴にもじ肩衣、若黨三人挾箱、對の奴草履取、十枚のりの付紙臺、足打ち早め敵の門、「物もう」と云ふもなまり聲、内より下人が「どれい」と答へ、溝端につくばへば、何かは聞えず漸暫し、頭をふり廻つて口上の上のべて進上臺を差出せば、下人は受取腰屈めそのまゝ内に入にける。文六天窓をかいて、「エ、拍子に乗たる先を折る、如何はせん」ともがきしを、彦いやくく屈する事なかれ。屋敷方か御所方か、囃子を勤めし禮物と見請たり。返事を聞て返るぶん、隙はいるまじ待て見

きごつなげー無
愛想

妙法蓮云々法
華經第廿五普門
品の初の句
うちどひー探り
聞ふ

よ」と、云ふ内に以前の下人立出て、「是へ」といへる氣色にて主人内へ入れれば、若黨中間草履取鎗を軒端に立懸て、皆々内に入るは事緩かに見へてけり。外より様子を窺はんと立寄り見れ共中戸を閉め、人音計聞へし所に、托鉢の道心者「はつち〜」と門に立下女の聲して「忙がしい通りや」ときごつなげにも高聲なり。すご〜通る法師を呼かけ、彦、是々御坊、御身が衣の破れまはつて見苦しさよ。此金子を報酬する、新らしいを買ふて夫を是に脱でいきや。非人にとらせ喜ばせん」と小判壹兩與ふれば、夢かと思ふ貞つきにて、「ア、是は如來様」と頂き〜伏拜み、「夫なら御意に任せませう」と古著は脱でぞ通りける。彦九郎打顔ひ辻なる門の片蔭にて、頭巾引込阿彌陀笠、上に衣を引張て暖簾のつまよりさし視き、豫て覺し普門品、本望遂る身の祈禱。案内検見の便りとも力を添へて只頼め、「妙法蓮華經觀世音菩薩。普門品第廿五。爾時無盡意菩薩。即從座起偏袒右肩合掌向佛。而作是言。世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音菩薩。」エ、喧ましい黙りや。遣ふ」と走り出る、下女が手の内うらどふて、彦申女郎様、早々からの御客そうな、誰様で御座る」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舎の御侍、これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿様から鼓故に御加増があつたけな。是も師匠の御蔭じやてよ、

つらりーまんへ
んなく
讀やつたと一堀
川波鼓に此下に
「て」文字あり

編笠召云々此
下原本不明堀川
波鼓によつて補
ひたり

今度禮に御座つたが、旦那様へ銀十枚、内義様へ壹歩五ツ、私等までつらりと三百宛あた
たまつた。汝身わがみの一日朝いちにちから晩まで咽喉のどの穴の痛い程、觀音經くわんのんきやうを讀よまつたと三百は貰
やるまい。さらりと經きやうを取とりて手鼓てつづみなりとも拍うたがよい。今からでも鼓うを拍うちや」と、
問はず語りの口早くちはやに、云捨すて内に駈かけ入いける。彦九郎打領うらうなづき、「様子は聞たり今からでも、
鼓つづみをうてとは吉きつ左右さうよし」と、皆々叫こゝろき勇ゆうみける。時ときを移うつさず客人かきんは上下かみしも脱ぬいで脇指計わきさしはかり、
編笠被あき只壹人傍あたりを忍しのぶ風情ふうじやうにて、立賣ひんがしを東とうへ洞院南どういんなんへ下くだりける。人々一所ひとにこそ
り聚より、是こゝはきつと推量すいりやうするに、只今の侍さむらいが下人共かみどもを残のこし置おき、表おもてに鎗やりも置おきながら其身みは是
にゐる體たいで、祇園會ぎげんかいの山鋒やまほこを見みに行ゆくと覺おぼへたり。七八人の下人共かみども留とどめて有あるから、中々
容易たやすく討うた難たがし。如何いかはせんとりとりに小聲こゝろに成なりて談合だんがふす。文六ぶんろくこらへぬ若者わかの、「斯
様に云いふてはいつ迄までも本望ほんぼう遂つひの時節じせつはあらじ。下郎共かみどもあらばあれ、めざす敵かたきは只壹人、
助すけ太刀たちあらば撫切なできりのそれから運次第うんじだい。いで切入きりいん」と駈かけ出いで、「やれ待まちて思案しあんできたり」と、
と、押おしめて彦九郎又門またかどに立暖簾のれんあけ、「是申頼まをみませう、先程まへはより編笠あ召めしてお出いでな
された殿達どのたちは、山鋒やまほこ見みにがなお出いならん。三條上さんじやうる室町むろまちで、喧嘩けんわしだして大勢おほに取巻とりまれ
てござります。お知しせ申まを」と呼よはりける。是こゝはしたりと下人共かみどもはらくと駈かけ出いで、「三條

先勝の時―我が
先を制して勝つ
べき時

中ば―半

さしつたり―心
得たり

かせ―枷にて妨

むしこ―蟲籠に
て細かに子を打

とはどふ行ぞ。室町とはどちらへ行。北か西か」と追取刀我劣らじとぞ走りける。彦「サア此方の謀畧當らずと云事なく、運のさかり刻限先勝の時至れり」と、衣脱捨ふはと捨親子の脇指兩人の、女に渡せば心得て鐔打ならしほつこんで、鉢巻りよく抱へ帯からけし膝口しろくくと、小足を踏んで立たるは男優りといひつべし。「南無正八幡大菩薩神力威力を添へ給へ」と、心中に祈念して二人の女は堀川口、親子は立覺西東へ立ち別るゝと見へけるが、中戸障子を蹴破てばらくと駈入たり。思懸けなき家内には下女も下人も「あゝ怖や」と、裏口さして逃出る。「あれこそ宮地源右衛門」と、お藤に聲をかけられて、安閑たる源右衛門、立上つて二階階子、中ば上つて腰打かけ、拳を握り左右を睨んで控へしに、隙間もあらせず二人の女兩方に引そふたり。彦九郎大音あけ「我こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顯によつて、女は先月廿七日に刺殺す。妻敵やらぬ」と聲を掛、抜打にはたと切る。「さしつたり」と足をあげ、階子に手をかけ「ゑいやつ」と、二階へ上るを追縄い上らんとせし所を、源右衛門が女房、かけたる長刀おつとりののべ、上はたてじと切結ぶ。下人共は物合より、捍棒杖よ箒木よと、支ゆるもかせと成、ためらふ内に源右衛門むしこより手を出し、軒に立たる鎗おつ取、上り口よりさし下しに上

ちたる窓（燈遊
笑覧）

ものくしや
小堀な

枕箱―用捨箱に
窓の設などにや
枕五つ宛を置ね
箱に入れたるも
のとある是也
辻の門―町の境
の門
尾垂―扉を閉西
にてかく呼ぶ
（物類行評）

聊爾―組忽

らば突んといふまよに、眞下しにぞ突かけたる。彦九郎冷笑ひ「何んの己れが鼠突、鼓
の胴こそ握る共、鎗の柄握る習ひは知らじ。身の好たる細工鎗、手竝を見よ」と、蛭巻
よりかつしと切てぞ落しける。頭ものくしや」と腕の力、碁盤片手に振上げて、「こりや我
は固より武士ならず、鎗持すべは知らねども鼓のお蔭でうつこと覺へた。此碁盤請て見
よ」と狙ひすましてはたとうち、双六盤將碁盤とつては投げく、後には火入烟草盆
風呂釜茶碗枕箱、ぐはらりとうちあけ手に觸るを、ばらりくくと投たるは唯降雨の如く
にて、寄べきやうもなき所に、妹のおゆら表へ廻り、辻の門に手を懸て柱を傳ひ貫木ふ
まへ、をだれより這上つて抜打に丁ど切る。源右衛門詮方なく四尺屏風を倒しかけ、上
よりとつて押ゆれば勿返さんと挑みあひ、終に脇指挽取りたり。其隙に彦九郎、階子を上
つて「餘さじ」と、追立々々切結ぶ。手ひどくなれば叶はじと大道へこそ飛だりけれ。
追續てひらりと飛、橋の上迄切出る、四丁町より「すは喧嘩」と東西の門を打ち、擲き
殺せと聚まつたり。貳人の女房大音上、「訴へ申た敵討、外の人にはかまいなし。聊爾を
するな」と聲をかけ、門の左右につよ立けり。二人は爰を大事ぞと息休めては打合せ、
命限りに火を散し、花を亂して切合しが、然共彦九郎侍の身で、町人を見苦しとや思ひ

會所一町の役所

ちやんぎりー山
鉾の隣によそへ
てへり

けん、其身は然のみ働かず、打懸れば追拂ひ、二三度採せて是迄と、射る矢の如くつよ
と入、弓手の肩先馬手のさがりに、ざんぶと切て打落せば、いぬるにどうとぞ臥たりけ
る。文六やがて飛懸り、「母の敵」と切つくる。「藤が爲には姉の敵、受取れ」と丁ど打ち、
同じくゆらは「兄嫁の敵恨の刀」とはたと切。四人一所に乗掛つて、一度に止めを刺た
るハ前代未聞のふるまひなり。壹町集り棒突竝べ、「敵討とは申ながら町内の念の爲、腰
の物を預て有無の御下知有迄は、外へは落し申されず。會所へ取て押込よ」と、四人の
男女打圍い徐つくと歩み行、見事さ立派さ心地よさ、世上にぱつと噓し立、言渡した
る山鋒の、ちやんぎりしつきり切つたりや、討たり敵妻敵討、咄の通りまつすぐに、い
へば云はると舌三寸の、操りの御評判とぞ成にける。